

2020 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	就活生が自己理解を行うための対話型ソフトウェアの開発・評価
キーワード	① 自己理解、②就職活動、③キャリア教育

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏 名	タカハシ トオル 高橋 徹
配付時の所属先・職位等 (令和2年4月1日現在)	実践女子大学 生活科学部 助教
現在の所属先・職位等 (令和4年7月1日現在)	実践女子大学 研究推進機構 研究員
プロフィール	2008 年 東京工業大学総合理工学研究科知能システム科学専攻博士前期課程修了。2011 年 同大学大学院博士後期課程修了 博士（工学）。2011 年～2012 年 関西学院大学大学院理工学研究科 博士研究員。2012 年～2013 年 横浜国立大学成長戦略研究センター産学連携研究員。2013 年～2014 年 学習院大学計算機センター助教。2014 年～2018 年 東京理科大学工学部第二部経営工学科助教。2018 年～2021 年 実践女子大学生生活科学部助教。2022 年 実践女子大学研究推進機構研究員でキャリア教育の研究と実践に従事。現在に至る。

1. 研究の概要

新卒で就職した者の3割が3年以内で離職してしまう原因は、就職した企業と自身とのミスマッチが原因の一つである。これを解決するためには就職活動の際に就活生が十分に自己理解を深める必要がある。そこで、本研究は自己理解を促す方法として問題解決手法の「なぜなぜ分析」を利用したアプリを提案した。問題解決手法は問題の本質を見つけるためのものであり、それを自己理解に利用することで自己理解を深め、自身の本質を発見することにつながると考えた。アプリを開発し、利用者のアンケート結果から分析した結果、アプリを使って自己理解を深めることができると確かめられた。一方で、操作方法などを間違えた実験参加者もいたためインタフェースの改良が必要であることも分かった。

2. 研究の動機、目的

新卒で就職した者の3割が3年以内で離職しているという問題がある。この問題は1995年以来ほぼ変わらず続いている。この原因の大きなものの一つに就職した企業とのミスマッチがある。労働政策研究・研修機構の2017年の調査でも勤務先を離職した理由として「自分がやりたい仕事とは異なる内容だったため」や、「仕事がうまくできず自信を失ったため」など就職した企業とのミスマッチが関連すると考えられる理由が大きな割合を占めている。こうなった原因は就職活動中に行っていた自己理解が不足していることが原因であると考えられる。

これまで著者が行った調査により就職活動時の自己分析の取り組み具合と就職後3～5年経った時点での企業に対する満足度の間には相関があることが明らかになっている。また、自己分析の各項目（特徴、やりがい、自身が望むワークバランスなど）を集計した値については就職時点での満足度よりも就職後の満足度のほうが強い相関になっている。これらのことから

就職活動時の自己分析の質を向上させることが離職率を下げることに繋がると考えられる。

そこで本研究では、自己理解を促す方法として問題解決手法を導入することを提案した。問題解決手法の多くは問題を掘り下げて本質的な問題を発見することである。これを自己理解に利用することで自己理解を深め自身の本質を発見することにつながると考えられる。本研究では問題解決手法としてなぜなぜ分析を利用する。この方法は問題に対して「なぜ？」を繰り返し問うことで、問題を掘り下げて本質的な問題を発見するものである。ただし、なぜなぜ分析で「なぜ？」と問うだけで掘り下げることは必ずしも簡単ではない。したがって、なぜなぜ分析の進行に合わせて問題を掘り下げていくヒントになるようなメッセージを出すためにアプリとして実装した『なぜなぜ自己分析アプリ』を開発する。また、このアプリを実現するためになぜなぜ分析の切り口としてどのようなものが良いかの調査も必須であると考えた。

3. 研究の結果

なぜなぜ分析の切り口の調査として、どういった経験が自己理解に結び付くかの調査を行った。この調査では大学生時代の学業やアルバイトといった経験にどれほど力を入れたかという質問とともに、その経験が自己分析に役に立ったかを尋ねている。調査対象は新卒で就職後3～5年目を迎えた社会人1,600人である。調査の結果、力を入れた経験ほど自己分析に結び付くことが明らかとなった。この結果をもとにアプリでは力を入れた出来事が何であるか尋ねるところから開始するように設計した。

このアプリでは入力された出来事に対して特に思い出される出来事とそれに伴う感情を尋ねる。そして、その感情をなぜ抱いたのかを尋ねる。さらに、その回答に対して「なぜ？」を繰り返し尋ねることで出来事の深堀を促し自己理解に結び付ける。

このアプリの評価のために実験を行い、アンケートにて評価を行った。実験では学生にこのアプリを使った自己分析を行ってもらい、自己理解に結び付いたかななどをアンケートにて評価を行った。アンケートの結果からアプリにより新しい発見があったり、それぞれの出来事について自己分析を深めることができたことが明らかになった。ただし、自由記述の指摘に分析の仕方が正しいのか自信がないという回答があったため、例えばどのようにアプリを進めればよいのか例を示す必要があることが示唆された。また、分析を終え結論を書くところまで取り組んでいない実験参加者もいたため、インタフェースが分かりづらかった可能性もある。進め方をより分かりやすくするか、フルプルーフを付けることで見落としが無いようにする工夫が必要だと考えられる。

4. 研究者としてのこれからの展望

本研究により、問題解決手法による自己理解の方法が有効であることの一端を示すことができた。今後は今回開発したアプリの問題点を改良し、多くの就活生が利用できるようにリリースすることを計画している。

一方で、今回利用したなぜなぜ分析以外にも、問題解決手法で自己理解を促すことができる可能性もある。そのため、今後は就活生の自己理解の難しさを分析することで、それを解決するための問題解決手法の導入を検討する。また、それを今回と同様にアプリとして開発することで広く就活生が利用できるようにする。

これらの研究を通して就活生の自己理解を助け、自身にとって望ましい仕事を見つけることに貢献することを目指す。そして、就職した者の3割が3年で離職してしまう現状の解決に結び付ける。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

この度は若手研究者奨励金を授与していただき、誠にありがとうございました。この研究は若者がキャリアを前向きに考え、生き生きとした人生を歩むことに貢献するものです。今後さらなる研究を行うことで、一日も早く成果を就職に悩む若者に届けたいと考えています。また、この研究をきっかけに、よりアプリを使った自己理解を深める方法が増えることにより、若者が身近に自己理解に関心を向ける機会が増える社会になってほしいと考えています。